千刈狸の呟き

～聴診器～

月影の狸

聴診器が誕生してから、基本構造は殆ど変わらぬまま200年経つという。日常的に使っている聴診器にまつわる思い出をいくつかとりあげてみる。

『さすが大先輩』

町の住民健診なども担当し始めた頃の事である。大先輩の隣で診察していた時、ふと見ると大先輩は聴診器を首にかけたまま（耳に入れずに）住民の診察をしていた。聴診器をあてながら、楽しそうに談笑している。住民は満足そうに「どうも…」と交替していく。これはいったいどういう事なのかよく分からずにいたが、後日顔見知りになった頃訊いてみた答えが凄かった。

「この頃めっきり耳が遠くなって、よく聞こえないのであれでいいんだ。耳を蓋したら会話が成立しないじゃないか…」

コミュニケーションのツールとしてのそれなので良いのだという。ちなみに大先輩は打診も前２回後ろ２回ちゃんとやっていたけれど多分お約束みたいなものだったのだろう。ずっと住民に愛され続けていた大先輩だった。

『聴診器の間』

医師となり数年が経ち、学生時代から使っていた聴診器を買い換える事にした。パソコンも携帯もない頃なので業者にパンフレットを頼んで検討していた時の事だ。医局の先輩が傍に来て両耳に指を入れて「聴診器を選ぶのも大切な事だけれど、最も大切なのは聴診器の間だよ。」と静かな口調で語った。聴診器の間とは、つまり人間、聴診器で挟む頭を含めたトータルとしての人間。有難い教訓として時々蘇ってくる。

『優しい聴診器』

前日の患者さんの急変時の対応は最善だったのかどうかと、ずっと自問自答を繰り返して、外来の患者さんが途切れると又再びグルグルとマイナス思考を繰り返していた日の事である。その女性の家庭は様々な問題を抱えていて日々大変な苦労をしている事はよく分かっていた。風邪気味で来たというのでいつもの様に診察し特別な事も言わずに「お大事に…」と言うと「先生の聴診器は優しいですね。」と言われて「そう？小児用だからじゃないかな？」と言うと「そう感じたのです。ありがとうございました。」と退室していった。

このやりとりの後、すーっと胸が軽くなりやがて温かくなっていくのが感じられて、聴診器を通じて私の方が癒された事に気づいた。今の私の聴診器はいったいどんな感じなのだろう？

『象牙の聴診器』

象牙でできた聴診器で診療していた場面を最後に見届けた世代だと思う。学校健診でも象牙の聴診器で診ていただいた記憶がある。90歳まで現役を貫いた母を詠んだ短歌に出会った。

「　双の掌に小さき象牙の聴診器
　　ぬくめて昭和の女医なりき母　」

作者は今でも象牙の部分をペンダントにして大切にしているという。割烹着が白衣代わりにもなっていた頃の事である。